



●あきない世傳(せいでん) 金と銀

皆さんは、高田郁(かおる)が執筆した『あきない世傳金と銀』という書籍をお読みになったことがありますか？全13巻と特別編2巻です。

江戸時代に呉服屋を繁盛させた幸という女主人の物語です。この書籍の中には、着物や帯の色の描写をこれでもかというほど日本の伝統色がでてきます。本の一部は、鴉色、銀鼠、紅消鼠、黒鳶、江戸紫、松葉色、金鬱、藍白、鉄紺などがありました。多数の伝統色が書籍に連ねてありますので、ここではすべてを上げられないのですが、私が今回すぐ想像できなかった色には、「承和(そが)色」があります。菊の花の色のような少しくすんだ黄色を指し、色名は、平安京の仁明天皇が好んだ黄色い菊の花の色が由来とされています。他には、赤い着物と深い緑の帯が似合うという補色の勉強会を奉公人や丁稚がやっているのもなかなか先進的です。登場期間が短いのですが、雪乃という女性が男性よりもかなり少ないであろう色の見えが大多数の人と異なる色覚多様性の少数派であることが説明されていました。

この書籍は、多様な角度から色を学び深く感じ入ることができるものではないかと考えました。(幹事：昆野 照美)

●「JIS Z8120 光学用語」から

この規格は、光学及びその関連工業で用いる主な用語及びその定義について規定されている。項目が多いので一部を紹介する。

1) 基礎関係一般では、光子、放射、可視光線、紫外線、赤外線、蛍光、りん光、波長、周波数、反射率、屈折、各種のスペクトル散乱、光の強度など52項目の定義である。

2) 幾何光学では、光学系、光軸、光線束収差、レンズ、反射鏡など96項目の定義。

3) 干渉、回折、偏光及びホログラフィーでは、干渉、ニュートンリング、フレネル回折、偏光、二色性、ホログラムなど58項目。

4) 分光では、原子スペクトル、エネルギー単位、分光分布、ラマン散乱、分光感度、ラマン散乱など11項目が定義されている。

5) レーザ及び非線形光学では、パルスレーザ、気体レーザ、固体レーザ、半導体レーザ、色素レーザなどの各種のレーザ、光共振器、ガウスビームなど36目が定義されている。

6) 生理光学では、視力、遠視、近視、乱視、老視、水晶体、角膜、ガラス体、すい体、かん体、明順応、暗順応、スタイルズ・クロフォード効果、残像、明所視、暗所視、薄明視、輝度弁別域、グレアなど40項目が定義されている。

(永田泰弘)

●日本の伝統的な色名・瑠璃色

色の名前で、仏教の経典の中に登場するものがある。

瑠璃は琉璃とも書き、梵語と言われるサンスクリット語を源流として漢字になった言葉で、仏教の七宝の一つである。

無量寿経では、金、銀、瑠璃、玻璃、磲、貝、瑪瑙を七宝としている。玻璃は水晶やガラスを指す。

源氏物語には「瑠璃の杯」、枕草子には「瑠璃の壺」が登場するなど、古くから色名として使われていた。

瑠璃は青色の美しい宝石あるいは貴石のラピスラズリの事で、日本語では青金石と言われ、印度、中国、日本では仏像の装飾等に使われ、荘厳な美を演出していた。

やがて、ラピスラズリが、ウルトラマリンブルーの名で活躍する時代がくる。

イタリアやフランスの美術界で、青金石を砕いて粉末化した顔料が、青色の絵の具の原料として珍重されるようになり、地中海を超えて、ヨーロッパに入ってくることからウルトラマリンブルーと呼ばれ、聖母マリアの衣の色に使われ、後世、青の画家とも呼ばれるフェルメールやゴッホの作品に残されることになった。

(永田泰弘)